

## 「特別の教科 道徳」の現状とこれからの課題

2021.01 後藤 忠

「道徳の時間」が新たに「特別の教科である道徳」(道徳科)と位置付けられることによって期待されたことが3つあった。

- 1 すべての学校のすべての先生が、同じ程度に道徳教育の重要性を理解し、特に道徳の授業に関心を払い、授業を大切にするようになること
- 2 全ての児童生徒に教科書が行き渡り、どの学校でも同じ程度の道徳の授業ができるようになること
- 3 評価を適切に行い、それを指導に生かすようになれば、道徳授業が工夫・改善され、実効性ある授業が展開されるようになること

### 1 「特別の教科 道徳」(道徳科)誕生の経緯

今から8年前の2013年(平成25年)2月、総理大臣の諮問機関である「教育再生実行会議」が「道徳の教科化」について緊急提言を行った。その背景には大津市のいじめ自殺事件などの深刻ないじめ問題があった。

提言を受けた文科省は「道徳教育の充実に関する懇談会」を設置し、これからの道徳教育の在り方についての検討を諮問した。そして、同年12月懇談会はその審議結果を文科相に報告した。

その報告書で、「道徳」の時間に関する「学校と教師の実態と課題」を次のように指摘した。

- ① 道徳教育そのものを忌避しがちな風潮がある
  - ② 他教科に比べ軽んじられている
  - ③ 道徳教育の理解が不十分である
  - ④ 効果的な指導方法が共有されていない
  - ⑤ 授業が登場人物の心情を理解させるだけなどの型にはまったものになりがちである
- そう指摘した上で、(現行の道徳教育の考え方

は)「今後とも重要であり、引き続き維持していくことが適当である」と結論付けた。

懇談会から報告を受けた文科省は、「道徳教育の教育課程上の位置づけ等の在り方」についての検討を中央教育審議会に諮問した。

中央教育審議会では、会内に「道徳教育専門部会」(特別部会)を設置し、そこで教育課程に関する諸課題について10回にわたり具体的な検討を行った。そして、2014年(平成26年)10月、その検討結果を文科相に答申した。

文科省は2015年(平成27年)3月、答申に基づき、小学校(中学校)学習指導要領の一部(道徳関係)を改正し告示した。合わせて、学校教育法施行規則の一部も改正した。

さらに、同年7月「小学校(中学校)学習指導要領解説 特別の教科 道徳編(以下、「解説道徳編」という)」を作成し、発行した。

### 2 道徳の混乱

学校で「道徳」の混乱が目立つようになったのは学習指導要領の告示前後からであった。

その混乱の原因の一つと思われるのが、解説道徳編第1章総説(pp2)で述べている以下の文である。

(今回の改正は)・・・の内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである。このことにより、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものといわなければならない」、「多様な価値観の、時には対立がある場合も含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」との(中教審)答申を踏ま

え、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」への転換を図るものである。

学習指導要領として異例な特定の指導方法が記され、解説道徳編には耳新しい言葉が並んだ。

さらに同 pp3、4 に

道徳教育を通じて、個人が直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見つめ、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できるようにしていくなどの改善が必要と考えられる。

と、わざわざ「道徳教育を通じて」と断って述べているにもかかわらず、「道徳科の授業の中ではこうした指導を取り入れなければならない」といった誤解が広まったためだと私は考えている。

そしてその頃から、道徳の専門家として著名な人達が教育委員会などが主催する教員研修会で「今までの道徳は時代遅れだ、古い道徳だ」と決めつけ、これからは「問題解決的な学習や道徳的行為に関する学習、考える道徳、議論する道徳が授業の主流になる」といったいわゆる「新しい道徳」を煽る動きが急に活発化していった。

その煽りに乗せられ、道徳の特質や目標を無視したデタラメな授業<sup>⑥</sup>があちこちの学校で、特に若い教師の間で目立つようになっていった。

時期を同じくして、某教育委員会が作成し、管下学校の全教員に配布した劣悪な啓発資料が道徳の混乱に一層拍車をかける結果になった。

そうした渦中、今まで道徳授業に地道に取り組んできた教師たちから、「これからは今までとは違う道徳になるのか?」といった不安や戸惑いの声が多く聞かれるようになった。

### 3 「これまでの道徳」についての理解

「道徳教育の充実に関する懇談会」、「中教審道徳教育専門部会」、「学習指導要領改善協力者会議」のいわゆる専門家、責任者、メンバーは「これまでの道徳」について具体的にどう理解し、どう評

価しているのか?

「60年も『道徳』の時間の指導をしてきたのに一向に指導の成果は挙がっていない、指導に実効性がない」、「『道徳』の時間の指導法は大きな壁にぶつかり、行き詰って、もはや身動きがとれないでいる」と理解しているのか? 「劣化し、形骸化し、硬直化した時代遅れの古い道徳である」とでも評価しているのか?

いや、それは違う!

「道徳」の時間の指導の成果が挙がっていないのは、多くの学校や教師が道徳教育を忌避し、「道徳」の時間の指導に本気で取り組んでこなかったからであり、指導の工夫・改善を怠ってきたからに他ならない。

そんなことは学校関係者なら誰だって分かっていることである。そうした歴然とした事実をきちんと正視した上で、いわゆる「新しい道徳」を啓発しているのか?

もしそうでないとしたなら、真に無責任極まりない啓発と言わなければならない。

また、道徳教育を忌避してきた学校や教員に対し、長年に渡り唯々諾々とお座なりな指導を繰り返してきた教育委員会には大きな責任がある。

こうした教育委員会や学校に限って、このたびの「道徳」の新たな位置づけに浮き足立ち、節操もなく耳新しいだけの胡散臭い言葉やでたらめな指導法に飛び付き、「評価だ、評価だ」と右往左往していたではないか。

こんな主体性のないことでは、これからの道徳科の実効性などほとんど期待できない。

一方、今まで「道徳」の授業をちゃんとやってきましたと言う者にも責任がある。

子供に学び、その学びを授業改善に生かすという真摯な探究心を忘れ、独善的で形式的な授業を繰り返し、あるいは間違いだらけの教師用指導書をなぞるだけの手抜き授業を続けてきた結果、「道徳」の魅力や他の人に伝えられなかった責任は極めて大きい。

いずれにしても、「道徳」の魅力は教師が思いを込めて行う授業の、子供が学ぶ姿で伝えなけれ

ば他者には届かない。

#### 4 「これからの道徳科」の課題

小学校で「道徳科」が始まって間もなく3年が経つが、最近ではひと頃の騒々しい道徳科熱は冷めつつあるように感じる。(と言っても、単なる評価熱だけだが…)

しかし、道徳科を「にわか」で終わらせてよいのか。仏を作ったら、魂を入れなければならない。

特に、今後大いに期待したいのは校長の**本気度**である。児童生徒の人間形成の中核を担う道徳教育は学校経営の中心課題であり、その充実には校長の力強い教育ビジョンの提示は欠かせない。校長が掲げるビジョンに向けて、校長の指導の下に全教職員が一丸となって取り組むところに道徳教育の成果は顕れるのである。

したがって校長は、「私は道徳のことがよく分からないから、(道徳教育推進教師に) よろしく頼む」では、もうだめなのである。

校長が本気になれば教職員も本気になり、道徳教育の成果は大いに期待できる。

繰り返すが、新たな枠組みにより教育課程上の「道徳」の位置づけが「特別の教科 道徳」に変更されたが、道徳の学習の特質や目標の本質、つまり道徳の授業で「児童生徒は道徳的価値の自覚を深める学習をしっかりと行う」という本質は変更さ

れた訳ではない。このことをもっと強く意識しなければならないと思う。

もとより私には、新しい指導法の開発を妨害したり、阻止したりする意図など微塵もない。研究開発こそ教師の使命であることを十分自覚しているつもりである。

私の言いたいことは、教育は手段(方法)よりも目的(ねらい)を優先して考えなければならないということである。

「何を育てるためにその指導法を用いるのか、どんな指導効果を期待してその指導方法を取り入れるのか」といった指導意図や指導観を第一にした議論、本末を顛倒しない議論が必要だと言っているのである。目標を無視した方法論は無意味だ、あり得ないことだと言っているのである。

しかし、残念ながら道徳の「目標」を正視した議論の声は、まだどこからも聞こえてこない。

まず、解説道徳編第1章総説 pp2~4 に記されている道徳科の目標に関する記述を正確に理解し、その理解の下で指導方法を論じなければならない。そうしなければ、いつまで経っても議論は噛み合わないし、指導方法の発展も期待できない。

今後の道徳科研究の最重要課題は道徳科の目標の共有にあると私は考える。各研究会はイの一番に「本時のねらい」についての議論を徹底的に深めるところから始めてほしいと望む。

### NG 学習指導(案)例 (教師用指導書の指導例を含む)

※ ここにはNGな「本時のねらい」とNGな「学習指導過程」だけを掲載する。

#### ★NG な「本時のねらい」

例1 人間の強さや気高さに触れ、人間としてよりよく生きることの喜びに**気付く**。  
(気付いて、それでどうするのか…?)

例2 正しいと思うことは、自信をもって行おうとする態度を育てる。  
(内容項目の文末に「態度を育てる」と付けたけただけの抽象的なねらい)

例3 よく考えて、自分にできることをしようとする態度を育てる。 A [節度、節制]  
(全く意味が分からないねらい)

例4 ◆ 相手のことを理解し、相手を大切にしようとする心情を育てる。  
<「たまちゃん、大好き」B [相互理解、寛容]>  
◆ 時と場をわきまえ、礼儀正しく真心をもって接しようとする心情を育てる。  
<『すんまへん』でいい』B [礼儀]>

(そもそも教材と内容項目が合っていない)

**例5** その他、論外なねらい

- ・「本時のねらい」がない学習指導案
- ・**学習活動**を「本時のねらい」に書いている  
(ex: ~について話し合う。~について知る。  
~について考える など)

**★NG な学習指導過程(学習活動、発問等)**

**例1** ・困っている友達がいたらどうしますか？  
 ・これからどんな親切をしますか？  
 (分かり切ったことを答えさせたり、  
 決意表明させたりする発問)

**例2** ・本当の友達とはどんな友達ですか？  
 ・誠実な人とはどんな人ですか？  
 (抽象的な概念や言葉の意味を考えさせる発問)

**例3** ・おばあちゃんにどんな出来事が起こり、  
 おばあちゃんはどう変わっていったでしょう？  
 ・セミが羽化するのにどれだけの時間がかかったか、  
 起きたことを順番に整理してみましょう。  
 (教材に書いてあることを答えさせる発問)

**例4** ・教科書 p.121 の「もっとこうすれば、きちんとできる」  
 に記入し、グループで発表しましょう。  
 ・(展開の後半の学習)あなたの「将来の夢」は何ですか？  
 (指導の意図がよく分からない学習活動)

**例5** ・「うばわれた自由」を読んで話し合う  
 (教材に関わる発問は「どう思いましたか」**だけ**)  
 ・「橋の上のおおかみ」を読んで話し合う。  
 (教材に関わる発問は「どんなところが心に残りましたか」**だけ**)  
 (子供の発達の段階を無視した大胆な発問)

**例6** 読売新聞 (2017.01.11) 記事  
 教育ルネサンス No.2200 「道徳科」前夜 4:

**読み物「自分だったら…」**

読み物教材を使った <b>従来型授業</b> の流れ
<input type="checkbox"/> 授業のテーマ (公正・公平など) について考える
<input checked="" type="checkbox"/> 教材を読んで話し合う ○ 登場人物はどう考えたか、どんな気持だったか
<input checked="" type="checkbox"/> 自分の生活を振り返り、教師の説話を聞く

↓ ↓

<b>「自分だったら」と考えさせる授業</b> の例
<input type="checkbox"/> 授業のテーマ (公正・公平など) について考える
<input checked="" type="checkbox"/> 教材を読んで話し合う ○ <u>主人公はどうすべきか</u> ○ <u>自分だったらどうするか</u>
<input checked="" type="checkbox"/> 自分の生活を振り返り、教師の説話を聞く

(本 HP 「クローズアップ道徳科」: vol.7 「もし君が○○  
 だったら」という発問はなぜ NG なのか? を参照)

**例7** ・もしショッピングセンターからの手紙が来なかったとしても、次に困っている人を見かけたとき、「わたし」は親切にできるでしょうか。  
 <「くずれ落ちた段ボール箱」B [親切、思いやり]>  
 (意味のない「たれば発問」)

**例8** ・おじいさんを無視した「ぼく」についてどう思うか。  
 <「おじいさんのあたたかな目」B [感謝]>  
 (浅はかなミニ評論家を育てる発問)

**例9** その他、論外な学習指導過程  
 ・「本時のねらい」を無視した学習指導過程  
 ・授業時間内には終わらない学習量の指導案  
 ・ワークシートを発表するだけの学習活動  
 ・11月なのにまだ「第8回道徳」という授業  
 ・子供の発言がなく、教師が自問自答して一方的に喋り続ける授業

以上